東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

4つの学校段階における障害児・者のきょうだいの意識

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2011-08-09
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 奥住,秀之, 神山,悠, 国分,充, 松尾,千瑞子
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/108105

東京学芸大学紀要　総合教育科学系Ⅱ　62: 39－45，2011.

4つの学校段階における障害児・者のきょうだいの意識

奥住　秀之*・神山　　悠**・国分　　充*・松尾　千瑞子***

発達障害学分野

（2010年9月27日受理）

Ⅰ　はじめに

障害児・者のきょうだい（本研究では，調査対象である障害のない兄弟姉妹を「きょうだい」，その兄姉弟妹（障害がある者もいれば，ない者もいる）を「兄姉弟妹」と操作的に定義する。先行研究では兄弟姉妹ではなく「同胞」が用いられることが多いが，障害のある兄弟姉妹に限定される誤解をさけるため本論では用いない）に関する研究が比較的多く積み重ねられてきた。近年は，まとまった研究レビュー（西村，2004；柳澤，2007；高瀬・井上，2007），研究報告書（諏方，2008），支援方法マニュアル（横浜きょうだいの会，2010）などが見られている。

障害児・者のきょうだいに関するこうした研究を見ると，兄弟姉妹の発達への肯定的影響，否定的影響などが検討され（西村・原，1996a；西村・原，1996b），前者にはきょうだいの自己概念の高まりや人間としての成長発達などが，後者としてはきょうだいの過剰負担やストレスなどが指摘されている。また，出生順位に関係なく，きょうだいは，障害児のある兄弟姉妹の支援者としての役割を担うことが多く，幼いときから大人のような受容的態度，我慢などを求められるなど，障害児・者のきょうだいは健常児・者のきょうだいと比較して様々なストレスを抱えることが指摘されている（平川，1986；西村，2004）。一方，きょうだいが中学生以降になると，兄弟姉妹のもつ障害を理解し，親と同じように兄弟姉妹を支援する姿がよく見られるようになるとも言われている（益満・江頭，2002）。きょうだいの悩みについての研究も多く（高瀬・井上，2007），彼らの適応に焦点を当てた研究も少なくない（原・西村，1998）。発達障害支援や特別支援教育の推進とも関連して，知的障害を伴わない発達障害のある兄弟姉妹をもつきょうだいの意識に焦点を当てた研究（浅井・杉山・小石他，2004），行動問題を消去する臨床的取り組み（難波・飯原・岩崎他，2006），親の負担等の関係性（芝崎・羽山・山上，2006）など様々なアプローチが見られている。

ところで，きょうだいの年齢と共に兄弟姉妹との関係性が変化することが指摘されており（福田・依田，1986），兄弟姉妹に対するきょうだいの意識も成長発達とともに変化することが推察される。障害児・者のきょうだいの意識における思春期・青年期の問題も指摘されている（高瀬・井上，2007）。年齢とともに兄弟姉妹への意識はどう変わるのか，その意識に兄弟姉妹の障害の有無は影響するのかなど検討すべき点は少なくないが，研究は必ずしも多くはなく知見の積み重ねが必要な段階にある。

本研究では，大学生を対象に，小学生，中学生，高校生，大学生（現在）の4段階で，兄弟姉妹の障害の有無でどのような意識の違いがあるのかを，質問紙法によって調査する。質問紙は先行研究（森下，1991；斉藤・乾原，2000）を参考に，親愛，羨望，保護の3領域を勘案した12項目を独自に作成した。

＊　東京学芸大学特別支援科学講座（184-8501　小金井市貫井北町4-1-1）
＊＊　東京学芸大学大学院教育学研究科
＊＊＊　大田区立馬込第二小学校

Ⅱ　方法

(1) 対象者

大学生743名を対象に調査を行い，欠損値のない有効回答数666部（男子246名，女子420名；1年生366名，2年生169名，3年生63名，4年生以上68名）を分析対象とする。そのうち兄弟姉妹のいない者（一人っ子）60名（9％）で，兄弟姉妹がいる者606名（91％）であった。606名のうち，障害のある兄弟姉妹がいる者36名（兄弟姉妹がいる人の5.9％），障害のある兄弟姉妹がいない者570名（94.1％）であった。障害児・者の兄弟姉妹がいる者については，兄9名，姉2名，弟17名，妹8名で，障害種は知的障害11名，自閉症8名，ダウン症候群5名，LD等の知的障害を伴わない発達障害6名，その他6名であった。

(2) 調査内容（質問紙の構成）

回答者（きょうだい）は，家族の一人の兄弟姉妹について（障害がある兄弟姉妹がいる場合，その者を優先する。複数の健常児・者の兄弟姉妹の場合，回答者自身がそのうちの一人を特定する），兄弟姉妹に関する意識の12項目（下記）について，小学生，中学生，高校生，現在（大学生）それぞれについて回答する（小学生，中学生，高校生については想起して回答する回顧的（retrospective）調査である）。回答は，それぞれの項目について，とてもあてはまる，ややあてはまる，あまりあてはまらない，全くあてはまらない，の4件法である。

①その兄弟姉妹のことが好きである。
②その兄弟姉妹と仲が良い。
③その兄弟姉妹に対して腹が立つ。
④その兄弟姉妹に負けたくない。
⑤その兄弟姉妹のことがかわいい。
⑥その兄弟姉妹のことがうらやましい。
⑦その兄弟姉妹のことを信頼している。
⑧その兄弟姉妹より自分の方が我慢している。
⑨その兄弟姉妹の将来が心配である。
⑩その兄弟姉妹がいなければよいと思うことがある。
⑪その兄弟姉妹を自分が守らなければならない。
⑫その兄弟姉妹の方が自分より優先されている。

また，フェースシートで回答者（きょうだい）年齢，性別，兄弟姉妹の障害の有無，年齢，性別，兄弟姉妹が回答者（きょうだい）よりも年齢が上か下か，兄弟姉妹は同性か異性か，兄弟姉妹数という8つを属性変数として尋ねる。

(3) 結果の処理

12項目について，とてもあてはまる，ややあてはまる，あまりあてはまらない，全くあてはまらない，の4件法の回答に，それぞれ4点，3点，2点，1点を与える。年代ごとに兄弟姉妹への意識の構造を検討するため，小学生，中学生，高校生，現在（大学生）ごとに12項目の因子分析を行う（主因子法，固有値1以上，バリマックス回転）。また，因子得点と兄弟姉妹の障害の有無（ダミー変数，あり1，なし0）との関連を調べるため，単相関分析（ピアソン積率相関係数）及び偏相関係数を求める。偏相関係数の統制変数は，回答者（きょうだい）の年齢，性別（男子0，女子1），兄弟姉妹の年齢，兄弟姉妹の性別（男子0，女子1），兄弟姉妹の年齢が回答者（きょうだい）より上か下か（下0，上1），兄弟姉妹は同性か異性か（同性0，異性1），兄弟姉妹の人数という7変数である。統計処理にはSPSSを用いた。

Ⅲ　結果

(1) きょうだいの兄弟姉妹に対する意識の因子構造

兄弟姉妹に対するきょうだいの意識の構造を4つの時代ごとに検討するため，各時代で因子分析を行った。小学生では3因子が得られ（表1），第1因子は「その兄弟姉妹のことが好きである」など3項目の因子負荷量が高く親愛因子，第2因子が「自分よりその兄弟姉妹の方が優先されていると思うことがある」など6項目の因子負荷量が高く羨望因子，第3因子は「自分がその兄弟姉妹を守らなければと思うことがある」など3項目の因子負荷量が高く保護因子と命名した。中学生では3因子が得られ（表2），第1因子は「その兄弟姉妹のことが好きである」など5項目の因子負荷量が高く親愛因子，第2因子が「自分よりその兄弟姉妹の方が優先されていると思うことがある」など5項目の因子負荷量が高く羨望因子，第3因子は「自分がその兄弟姉妹を守らなければと思うことがある」の2項目の因子負荷量が高く保護因子と命名した。高校生では3因子が得られ（表3），第1因子は「その兄弟姉妹のことが好きである」など4項目の因子負荷量が高く親愛因子，第2因子が「自分よりその兄弟姉妹の方が優先されていると思うことがある」など5項目の因子負荷量が高く羨望因子，第3因子は「自分がその兄弟姉妹を守らなければと思うことがある」など3項目の因子負荷量が高く保護因子と命名した。現在（大学生）では3因子が得られ（表4），第1因子は「その兄弟姉妹のことが好きである」など6項目の因子負荷

表１　小学生時代の因子分析の結果（主因子法、バリマックス回転）

項　目	因子負荷量			共通性
	親愛	羨望	保護	
①その兄弟姉妹のことが好きである	.900	-.026	.131	.827
②その兄弟姉妹と仲が良い	.807	-.002	.141	.671
⑦その兄弟姉妹のことを信頼している	.691	-.001	.013	.253
⑫その兄弟姉妹の方が自分より優先されている	-.053	.675	.247	.396
④その兄弟姉妹に負けたくない	.082	.623	-.042	.511
⑥その兄弟姉妹のことがうらやましい	.312	.560	-.003	.411
③その兄弟姉妹に対して腹が立つ	-.133	.485	-.015	.478
⑧その兄弟姉妹より自分の方が我慢している	-.072	.477	.347	.353
⑩その兄弟姉妹がいなければよいと思うことがある	-.387	.451	.097	.217
⑪その兄弟姉妹を自分が守らなければならない	.135	.032	.776	.363
⑤その兄弟姉妹のことがかわいい	.354	-.029	.620	.621
⑨その兄弟姉妹の将来が心配である	-.063	.114	.447	.519
説明分散	2.365	1.839	1.416	5.620

表２　中学生時代の因子分析の結果（主因子法、バリマックス回転）

項　目	因子負荷量			共通性
	親愛	羨望	保護	
①その兄弟姉妹のことが好きである	.906	-.042	.118	.837
②その兄弟姉妹と仲が良い	.793	-.039	.170	.659
⑦その兄弟姉妹のことを信頼している	.726	.026	.004	.235
⑤その兄弟姉妹のことがかわいい	.540	-.001	.407	.311
⑩その兄弟姉妹がいなければよいと思うことがある	-.430	.311	.082	.457
⑫その兄弟姉妹の方が自分より優先されている	-.066	.702	.285	.453
⑥その兄弟姉妹のことがうらやましい	.341	.577	-.061	.528
④その兄弟姉妹に負けたくない	.015	.554	-.064	.455
⑧その兄弟姉妹より自分の方が我慢している	-.125	.552	.366	.227
③その兄弟姉妹に対して腹が立つ	-.212	.433	.042	.288
⑪その兄弟姉妹を自分が守らなければならない	.330	-.004	.694	.590
⑨その兄弟姉妹の将来が心配である	-.009	.108	.464	.579
説明分散	2.743	1.738	1.137	5.618

表３　高校生時代の因子分析の結果（主因子法、バリマックス回転）

項　目	因子負荷量			共通性
	親愛	羨望	保護	
①その兄弟姉妹のことが好きである	.878	-.050	.182	.806
②その兄弟姉妹と仲が良い	.775	-.044	.110	.615
⑦その兄弟姉妹のことを信頼している	.729	-.078	.024	.274
⑩その兄弟姉妹がいなければよいと思うことがある	-.465	.360	.036	.326
⑫その兄弟姉妹の方が自分より優先されている	-.035	.659	.207	.592
④その兄弟姉妹に負けたくない	.054	.564	-.074	.480
⑧その兄弟姉妹より自分の方が我慢している	-.133	.544	.263	.539
⑥その兄弟姉妹のことがうらやましい	.472	.504	-.055	.382
③その兄弟姉妹に対して腹が立つ	-.200	.477	.080	.186
⑪その兄弟姉妹を自分が守らなければならない	.320	.045	.697	.347
⑤その兄弟姉妹のことがかわいい	.500	.007	.584	.591
⑨その兄弟姉妹の将来が心配である	-.101	.148	.392	.478
説明分散	2.767	1.693	1.155	5.615

表４　大学時代（現在）の因子分析の結果（主因子法、バリマックス回転）

項　目	因子負荷量			共通性
	親愛	羨望	保護	
①その兄弟姉妹のことが好きである	.863	−.092	.173	.784
②その兄弟姉妹と仲が良い	.755	−.031	.082	.578
⑦その兄弟姉妹のことを信頼している	.736	−.089	−.084	.355
⑤その兄弟姉妹のことがかわいい	.556	.010	.474	.249
⑥その兄弟姉妹のことがうらやましい	.510	.420	−.125	.534
⑩その兄弟姉妹がいなければよいと思うことがある	−.486	.308	.012	.452
⑫その兄弟姉妹の方が自分より優先されている	−.103	.577	.194	.557
③その兄弟姉妹に対して腹が立つ	−.172	.553	.142	.352
⑧その兄弟姉妹より自分の方が我慢している	−.112	.504	.293	.260
④その兄弟姉妹に負けたくない	.097	.484	−.073	.331
⑪その兄弟姉妹を自分が守らなければならない	.336	.073	.607	.487
⑨その兄弟姉妹の将来が心配である	−.101	.157	.475	.382
説明分散	2.848	1.445	1.027	5.320

表５　各時代における３つの因子得点と兄弟姉妹の障害の有無との関係

因子名	小学生時代		中学生時代		高校生時代		大学時代	
	単相関	偏相関	単相関	偏相関	単相関	偏相関	単相関	偏相関
親愛因子	−0.008	−0.003	0.038	0.044	0.053	0.065	0.070	0.078+
羨望因子	0.015	0.019	−0.037	−0.027	−0.060	−0.054	−0.089*	−0.077+
保護因子	0.207**	0.202**	0.273**	0.275**	0.288**	0.3034**	0.274**	0.288**

+p<.1, *p<.05, **p<.01

量が高く親愛因子，第２因子が「自分よりその兄弟姉妹の方が優先されていると思うことがある」など４項目の因子負荷量が高く羨望因子，第３因子は「自分がその兄弟姉妹を守らなければと思うことがある」の２項目の因子負荷量が高く保護因子と命名した。このように項目の違いはいくつかあるが，すべての年代で親愛因子，羨望因子，保護因子という共通する３因子が抽出された。

(2) 兄弟姉妹の障害の有無の意識にかかわる影響

４つの時代で，親愛因子，羨望因子，保護因子と兄弟姉妹の障害の有無との関連を調べるため，各因子得点と兄弟姉妹の障害の有無との単相関係数及び偏相関係数を時代ごとに求めた（表５）。親愛因子において，単相関係数はどの年代でも有意ではない。偏相関係数も有意ではないが，現在（大学）がきわめて有意に近い有意傾向（p=.056）で，障害児・者のきょうだいで親愛意識が高い。羨望因子において，単相関係数は現在（大学）で有意で，障害児・者のきょうだいで羨望意識が低い（p<.05）。偏相関係数は現在（大学）がきわめて有意に近い有意傾向で，ここでも障害児・者のきょうだいで羨望意識が低い（p=.059）。保護因子において，単相関係数はどの年代でも有意で，障害児・者のきょうだいで保護意識が高い（いずれもp<.01）。偏相関係数も同様に，障害児・者のきょうだいで保護意識が有意に高い（いずれもp<.01）。

Ⅳ　考察

因子分析の結果，全ての年代で親愛，羨望，保護という共通の３因子が抽出された。本研究ではこうした因子を想定して項目を設定したのだが，どの年代でもそれに適合する結果が得られた。

障害の有無による意識の差異については，保護因子が全ての年代で有意であり，障害児・者のきょうだいは，小学校から大学のどのときでも，障害のある兄弟姉妹を保護する意識が健常児・者のきょうだいより有意に強いことがわかる。障害児・者のきょうだいにおける兄弟姉妹の将来への意識の高さ（吉川，1993）や，障害児のきょうだいで我慢が強いことが指摘されている（諏方，2008）。過剰負担やストレスも多く（西村・原，1996a；西村・原，1996b），障害児のある兄弟姉妹の支援者としての役割も指摘されており（平川，1986；西村，2004），こうしたことと障害のある兄弟

姉妹を保護したい意識の強さが関連していることが示唆される。きょうだいの意識は固定的ではなく，年齢に伴いダイナミックに変動することが先行研究で指摘されているが（福田・依田，1986），今回の12項目での兄弟姉妹を保護する意識の因子構造は，年齢にかかわらず一貫していることが示唆された。今後は異なる因子も視野に入れた調査が必要だろう。

一方，親愛と羨望の因子では，兄弟姉妹の障害の有無によるきょうだいの意識の差異は有意でなかった。ただ，有意傾向の水準だが，大学生では親愛意識が高く，羨望意識が低い傾向がみられた。先行研究によると，中学生のころは兄弟姉妹と生活との距離があるが，高校生くらいになると，それが変わるという指摘がある（松岡・井上，2002）。中学生以降になると，兄弟姉妹の障害を理解するようになり，親と同じように兄弟姉妹を支援する姿が多く見られるとも言われる（益満・江頭，2002）。今回の結果は，そうした報告よりも年齢の高い大学生になって見られてはいるが，高い親愛と低い羨望という意識が高くなる意識は先行研究と合致すると言えるだろう。

課題を２点まとめる。第一に，調査の方法論である。本研究では，大学生が過去の３時代を振り返るといういわゆる回顧的（retrospective）調査である。この方法は，同一個人（きょうだい）に複数の過去のデータを収集できる利点がある一方，当時の意識を正しく想起できるかという信頼性の問題を有する。先行研究で思春期・青年期の意識変化が示唆されているが（高瀬・井上，2007），本研究では中学生高校生の変化がさほど得られなかったことは，この方法論に関係したことも考えられる。長期的研究にはなるが，データを追跡的に入手するいわゆる予測的（prospective）方法も必要であろう。

第二に，同胞やきょうだいに関する仔細な分析である。今回は障害児・者のきょうだい群と健常児・者のきょうだい群と比較したが，このようにひとまとまりの障害児群での検討は今日でも見られており（三原，2003），障害の有無という差異は明らかにできた。とはいえ，障害種による違いもまた先行研究で重要視とされており（高瀬・井上，2007），今後の知見の積み重ねが必要である。

付記

本研究の一部は，文部科学省科研費補助金（研究代表者：奥住秀之，課題番号：21531012）により行われた。

引用文献

浅井朋子・杉山登志郎・小石誠二・東誠・並木典子・海野千畝子（2004）軽度発達障害児が同胞に及ぼす影響の検討．児童青年精神医学とその近接領域，45，360-371.

福田孝子・依田明（1986）ふたりきょうだいにおけるきょうだい関係（2）幼児期・児童期におけるきょうだい関係認知の発達的変化．横浜国立大学紀要，26，143-154.

原幸一・西村辨作（1998）障害児を同胞に持つきょうだいの適応に関する質問紙調査．特殊教育学研究，36，1-11.

早川孝子・依田明（1983）ふたりきょうだいにおけるきょうだい関係．横浜国立大学紀要，23，81-91.

平川忠敏（1986）障害児の同胞．幼年教育研究年報，11，65-72.

益満成美・江頭幸晴（2002）障害児のきょうだいにおける否定的感情表出の困難さについて．鹿児島大学法文学部人文学科論集，55，1-13.

松岡瑞幸・井上雅彦（2002）発達障害児のきょうだいにおける心理的成長過程における母親との意識のズレに関する研究．日本特殊教育学会第40回発表論文集，563.

三原博光（2003）障害児のきょうだいの生活状況 ― 非障害者家族のきょうだいに対する調査結果との比較を通して ―．山口県立大学社会福祉学部紀要，9，1-7.

森下正康（1991）大学生のパーソナリティときょうだい関係．日本教育心理学会総会発表論文集，33，395-396.

難波寿和・飯原有喜。岩崎由佳・井上雅彦（2006）発達障害児のきょうだい児に対する攻撃行動への行動論的アプローチ ― 家庭場面への指導の効果の検討 ―．発達心理臨床研究，12，133-141.

西村辨作（2004）発達障害児・者のきょうだいの心理社会的な問題，児童青年精神医学とその近接領域，45，344-359

西村辨作・原幸一（1996a）障害児のきょうだい達（1）．発達障害研究，18，56-67.

西村辨作・原幸一（1996b）障害児のきょうだい達（2），発達障害研究，18，150-157.

斉藤智美・乾原正（2000）きょうだい関係に関する研究（1）．日本教育心理学会総会発表論文集，42，124.

芝崎紘美・羽山順子・山上敏子（2006）障害児きょうだいの抑うつと不安について ― 家事の手伝い・障害児の世話との関連 ―．久留米大学心理学研究，5，75-80.

諏方智弘（2008）養護学校におけるきょうだい支援のニーズ調査と支援活動プログラムの検討．文部科学省科学研究費補助金研究報告書（奨励研究　研究代表者：諏方智弘

高瀬夏代・井上雅彦（2007）障害児・者のきょうだい研究の動向と今後の研究の方向性．発達心理臨床研究，13，65-77.

柳澤亜希（2007）障害児・者のきょうだいが抱える諸問題と支

援のあり方．特殊教育学研究，45，13-23.
吉川かおり（1993）発達障害者のきょうだい意識 ― 親亡き後の発達障害者の生活と，きょうだいの抱える問題について ―．発達障害研究，14，252-263.
横浜きょうだいの会（2010）きょうだい支援虎の巻．独立行政法人福祉医療機構「長寿・子育て・障害者基金」助成事業報告書.